

アウグスティヌス『アカデメイア派駁論』

—「知」と「不知」—

岡部 由紀子

『アカデメイア派駁論 *Contra Academicos*』は、回心後のアウグスティヌスが最初に着手した著作である。後にアウグスティヌス自身がこれを「入口で妨害されないため」の「論駁」として位置づけていることも、よく知られていよう¹⁾。この著作のなかでアウグスティヌスは、自身が「アカデメイア派に親しんでいた時期の絶望」を回想しながら、この批判をそこからの脱出として位置づけている (II. 9. 23)。その限りで、彼の懐疑論批判は、回心を経て (或は回心というかたちで) 彼が到達した、「知る」ということをめぐる全く新しい観点を語り出すものであったと言わねばならない。では、そこで論じられたのはいかなる問題であったのか。彼の懐疑論批判は何を標的にしており、その論駁を通じて出発点で彼は何を確認しなければならなかったのか。

多くの場合、“*Contra Academicos*” に於けるアウグスティヌスの懐疑論批判は、第Ⅲ巻7章14節以降の、いわゆるモノローグ *long speech (oratio)* 部分での批判によって果たされたと考えられてきた²⁾。そして、アウグスティヌスはここで、「何も知られ得ない」と主張するアカデメイア派に対して、感覚による認識の確実性や、論理的命題 (a か非 a いずれかであるという形の選言命題、等) の真、そしていわゆる *sum* の確実性を示すことによって³⁾、つまり、そのような「確実」な「真ないし知識 *vera, positive knowledge*」を反対例として挙げることによって、彼らの懐疑論を論駁しようとしたのであると、見做されてきた。その点では、彼のそれらの論点を懐疑論批判として有効であると肯定的に評価してきた人々も、これに否定的な現代の研究者達も、ほぼ一致して

いると言えよう⁴⁾。彼の懐疑論批判は、専らこのいわゆる「確実性」の論証をめざすものと見做されてきたのである。

だが、それは“Contra Academicos”を読み損なうことになるのではないか。我々は、テキストの検討を通じて、このモノログ部分の果たす「役割」を別の視点から説明し、より全体的な議論のうちに位置づけることを試みねばならない。しかし、とりあえず、次の点を指摘することは許されよう。それは、仮にその「確実性」の論証なるものを有効だとしても、なお、それだけでは最初にこの著作が書かれた理由、即ち、最初にアカデメイア派が批判されなければならなかった理由、は説明され得ないということである。というのも、先に述べたように、“Contra Academicos”での懐疑論批判は、当時既に相当の教養人であった、それ故に一般的な反懐疑論の論点も知っていた⁵⁾、アウグスティヌスの、それにも拘らず陥った絶望とそこからの脱出とを語り出すものとして捉えられなければならないからである。彼は、この「転回」によって、「真そのものを探求する *quaerere veritatem* という我々にとって最高の務め」(Ⅲ. 1. 1)を遂行することへの、そのような「生」を生きることへの、道を開いたと語っている。だが、上述の箇所に挙げられたような *positive knowledge* (ないし「私は知っている *scio*」と言えること)があると論証されたとしても、この「探求」の遂行は少しも可能にはなるまい。既に知られている *vera* と、探求すべき *veritas* との関係は、少しも自明ではないからである。また、アウグスティヌスが「生」をそのような *quaerere* として語ることは、この著作の随所に見出される彼の「不知の自認」と不可分に結び付いていると考えられる。だが、先の *positive knowledge* の論証とそのような「不知」との関わりもまた、自明ではないからである。これらを問うこと(それは“Contra Academicos”が何を論じていたかを明らかにする上で不可欠である)をしないで、ここに安易な仕方で、アウグスティヌスが述べてもいない照明説や或る種の位階的知識体系めいたものを持ち込んではいならない。我々はむしろ、Ⅲ巻7章14節以降の議論が果たす「役割」を、より全体的な議論のうちに探るべきである。

たしかに、この著作は、アカデメシア派に対するアウグスティヌスの態度が一貫していないかに見えることの故にか、一つの著作としての統一性を疑われ、その各巻相互の連関も軽視されがちである⁶⁾。ある人々は、第I巻をその成立直後に著された『よき生について De Beata Vita』との関わりのうちで理解しようとし、ここに照明説を読み込むことによって彼の懐疑論批判をいわば‘Veritasの存在証明’のようなものと見做している。また多くの研究者達の関心は(懐疑論批判ということに対するいわば「近代的」な視点に引き寄せられて)第Ⅲ巻7節以降に限定されがちである。しかし、この著作に対するそのようなアプローチは、この三巻からなる書物の全体を一つの論考として成立させたアウグスティヌスの観点を、容易に見失わせてしまうであろう。では、“Contra Academicos”全三巻を通じて語り出された、彼の新しい「知」についての観点とは、一体何であったのか。そのような観点を明らかにすることによって初めて、我々は、懐疑論批判を通じてアウグスティヌスが、「知る」ということをめぐるプラトン以来の探求の地平に提起していた抑々の問題が何であったか、そしてその現代的な意義は何であるのか、を共に考察する場を得ることができるであろう。以下においては、これまで“Contra Academicos”に於けるアウグスティヌスの懐疑論批判の眼目と見做されてきた、Ⅲ巻7章14節以降の議論について、最初に、(I)無視されがちな或る特徴的な論点を指摘すると同時にこの議論の本来の役割は別の視点から明らかにされるべきことを示したい。次に、(II)その別の視点とはいかなるものかを第Ⅲ巻全体の議論の流れのうちで明らかにすると共に、第I・II巻に触れながら、アウグスティヌスの「出発点」で論じられねばならなかったのは何であったかを示したい。

(I) 第Ⅲ巻の構成は、論述形式の相違によって、[A]対話部分(1.1-6.13)、[B]モノローグ long speech 部分(7.14-19.42)、[C]結び(20.43-45)、の三つから成ると考えることができる。大きな部分を占める[B]は、更に、次のように分けられるであろう。即ち、[B]全体の導入部である[B-a]7.14、

[B-b] 7.15~9.20, 及び「アカデメシア派が語っている二つのこと, 即ち perceptio と assensio」(10.22) に各々ふりあてられている [B-c] 9.21~13.29 と [B-d] 14.30~16.36, そして「アカデメシア派が何故に彼らの考えを隠したか」(7.14) についての哲学史風叙述にあてられる [B-e] 17.37~19.42 である。また, [B-c] は, 10.22 冒頭で「以上で勝利に十分だが……今度は perceptio について別のことを少し語りた」と言われていることに応じて, 更に, (イ) 9.21 と (ロ) 10.22~13.29 の二つに分けられよう。(イ) ではアルケシラースが, (ロ) ではカルネアデスが引き合いに出されている。そして (ロ) では, クリシッポスを意識するカルネアデスが, 従来のアカデメシア派の主張に nihil in philosophia posse percipi という限定を付加した (10.22) のに依ずる形で, アウグスティヌスは 10.23 から 13.29 までを, ストア風の哲学の三区分, (ロー 1) 10.22~11.26 自然学, (ロー 2) 12.27~28 倫理学, (ロー 3) 13.29 論理学, に対応させて論じている⁷⁾。

簡単な表を掲げておく:

[A] 対話部分	[B] モノローグ部分 (long speech)	[C] 結び 20.43~45
(a) 1.1~2.4	(a) 7.14	
(b) 3.5~6	(b) 7.15~8.17/9.18~9.20	
(c) 4.7~6.13	(c) 9.21~13.29 de perceptione (イ) 9.21 (ロ) 10.22-13.29 (1) 10.23 (自然学) (2) 12.27-28 (倫理学) (3) 13.29 (論理学)	
	(d) 14.30~16.36 de assentiendo (イ) 14.30-32/(ロ) 15.33-16.36	
	(e) 17.37~19.42 哲学史風叙述	

最初に指摘したいのは, 彼の議論を「確実性」の論証と見なす人々が注目してきた「perceptio をめぐる議論」[B-c] について, これまで見過ごされがちであった或る特徴的な論述が, 丁度この構成に正確に対応するように, 登場し

ていることである。このことを検討することによって、この箇所がいわば単独に読まれてそこで「确实性」の論証がなされていると見做されてはならないこと、そこでの議論の意義は異なった観点から考察されねばならないこと、を示すことができよう。

さて、「perceptio をめぐる議論」を構成する上述の各論（即ち [B] の (c-イ) 及び (c-ロ) の (1)－(3) の各々の議論）それぞれに、いわば律儀に登場してくる特徴的な論述とは、sapiens（知者）ないし sapientia（知恵）に言及する仕方でのアカデメイア派への短い反論のことである。そして我々は、それら各々の議論の大部分を占め、従来アウグスティヌスの懐疑論批判の実質的な論証を担うと目されてきた論述が、実はそれに対する stultus（知者でない者・不知者）に関わるものとして位置づけられていることに気付くであろう。即ち、「perceptio をめぐる議論」の各論は、いわば対比的に位置づけられる二通りの論駁から成っていることになる。以下では便宜的に、一方を sapiens 型、他方を stultus 型と呼ぶ。各々は、それぞれの箇所で開催にされることならについての sapiens とは、或は stultus とは、どのような存在であるか、という形式を採る論述のことである（後に明らかになるように知者と不知者をどのような存在として考えるかは、まさにアウグスティヌスとアカデメイア派との争点の核心に関わる問題である）。注意すべきは、各々が全く異なった論拠を持つことである。とりあえずは、その相違は、stultus 型が「何も知られ得ない」に対する反対例を挙げることをめざすのに対し、sapiens 型はいわば「誰にも知られ得ない」に対する反対例を挙げようとする、ということにあると言えよう。先ず、以下で簡単に、当該箇所を見なければならぬ。

[B-c-イ] 9.21 での sapiens 型の論駁とは、ゼノンの「知られ comprehendi, percipi 得るもの」の定義を充たすようなものは見出され得ないと言うアルケシラスに対する、アウグスティヌスの「君やその他の stultus 達からはそうである（見出され得ない）としても、何故 sapiens から有り得ないのか」という反論である。そしてここでの stultus 型とは同じ21節でこの後示される三種

の論駁を指すが、最終的には「ゼノンの定義は vera か falsa かであると私は知っている」ということを nihil scimus の反対例として挙げている、そのことを指す。注目すべきは、ここでアウグスティヌスは、それを stultus たる自分アウグスティヌスさえ知っていることとして位置づけているということである。

[B-c-ロ-1] 10. 22~23 では、カルネアデスが「知られ得ない」ことの論拠として挙げる「哲学者間の不一致」に対し、アウグスティヌスは先ず自然学者間の不一致を例にとって、「世界は一つか否か」といったことのうちの何かを知ることが sapientia に属すなら sapiens にそれが知られずにいることは有り得ず、それらがそうでない (sapientia に属さない) なら sapiens はこれらを見捨てるだろう、と sapiens 型の反論をする。そして更に、「これに対して私アウグスティヌスは、sapiens から未だ遙かに遠ざかっているのだが、これら自然学について nonnihil を知っている」と言って stultus 型の論駁を採るアウグスティヌスが挙げるのは「この世界は一つか否かどちらかだ」という類の選言命題の vera である。

[B-c-ロ-2] 12. 27~28 では次のように言われる。mores 習俗 (習わし) に関して、「私 (Aug.) がどう思うか arbitror」ではなく scientia を探求するのならば、sapientia に関して無知のはずがない sapiens に問うべきなのだ——sapiens 型。だがしかし sapiens に比べて愚かな私 (Aug.) にすら「boni humani finis は、全然存在しないか、animus に在るか、corpus に在るか、両方に在るかいずれかである」と知ることが許されている (licet scire) ——stultus 型。

[B-c-ロ-3] 13. 29 で彼は論理学 (dialectica) について、これを sapiens はよく弁えている (bene novit) としながらも、次のように言っている。仮に sapiens が dialectica を知らない (nescit) としたら、これの認知は sapientia に属さないことになり、その場合には彼はこれなしでも sapiens であり得る——sapiens 型。そうであれば、dialectica は「真であるか」とか「把握され得るか」とか、我々ごときが問題にするのは僭越となる。しかし私アウグスティヌスは dialectica を通じて多くのことを弁えた (novi) し、多くのことが vera esse と学ん

だ——stultus 型。

同様に、[B-d] の assensio をめぐる論駁も、後に見るごとく、[B-d-イ] sapiens 型、[B-d-ロ] stultus 型として捉えられ得る。

さて、以上に於いて注目されなければならないのは、sapiens と stultus とがいわば厳しく隔てられていることである。即ち、いわゆる positive knowledge の例と目されてきた諸例は、stultus である〈私〉でさえも知っていると言えることとして位置づけられているのであるが、それが sapientia に属すかどうかは stultus には知られ得ないとされているのである。14. 32 の最後では、「疑わしくないことなど何も見出さない〈私〉」と「sapientia をこそ見いだす sapiens」とが、くっきりと対比されている。両者がこのように隔てられるものであるとき、我々はアウグスティヌスの懐疑論批判の焦点がどこにあったのか問い直さざるを得ないだろう。なぜなら少なくとも、仮に、従来理解されてきたようにここで列挙される vera や positive knowledge の例（それらは我々の分類によれば stultus のレベルで語られるものである）が直ちにアカデメシア派の「nihil posse sciri」に対する反対例として有効だとしても、ここで何故アウグスティヌスは sapiens 型を共に登場させる必要があったのか、説明できないからである。この sapiens についての議論を無視して、stultus のところに位置づけられる諸々の「論証」だけを扱うことは、それら stultus 型の「論証」が担っていた本来の意義をも見失うことになろう。では、一体、何故二つの型が示されねばならなかったのか。

ところで、第三巻の [B] の終わりまでの議論はまた、少しずつ異なった角度から展開される三層の議論としても見ることができる。[A] の実質的議論が終わる 5. 12 末と、[B] の中程 10. 22 の冒頭、そして [C] の始まる 20. 43 の冒頭で、その都度アウグスティヌスが「自分にとっては以上で十分だ……」と述べていることは注目されてよい。この場合には、[A]、[B1] 7. 14~9. 21、[B2] 10. 22~19. 42 という区分になる。各々の層はいわば互いに響き合うよう

な重層的構成にあり、例えば [B] の (c) と (d) との「一対」は、[A] の 5.10 迄の「知られ得ない」をめぐる議論と 5.11 での「同意してはならない」をめぐる短い議論との「関係」を正確に反映し、各々の論点を継承するものとして読まれるべきものである。我々はこのような重層的構成に留意しつつ、各層の議論が一体どこで「十分」とされているのか見極めなければならない。そして、*sapiens* 型が登場することの意義もまた、これまで等閑視されてきた感のある [B2] の [A] 及び [B1] に対する重層的関係に注目することによって、明らかになし得ると考えられる。我々は次に、[A] 1.1~6.13 及び [B1] 7.14~9.21 (B-a, B-b, B-c-イ) を検討しなければならない。

(II-i) 第三巻の冒頭で、アウグスティヌスは、「力のかぎり真そのものを探求すること (*magnopere quaerere veritatem*)こそ最優先すべき務め (*negotium*)である」という点では、既に全員が一致していたことを強調する。そして、ここでの対話相手アリピウスやアカデメシア派もこの点では一致しているのであり、それは彼等の描く *sapiens* 像が「*veritas*を見出そうとしている者」であることから帰結するのであると、さりげなくしかしはっきり表明している。第三巻の論究の出発点はここにある。続く 2.4 迄での *fortuna* をめぐる対話を通じて、アウグスティヌスとアリピウスとの間の *sapiens* 像の違いが示唆され、これを承けて 3.5 以下で本格的な検討が始められるが、そこで吟味にかけられているのは、この「*veritas*を見出そうとしている(従って未だ見出してはいない)者」というアカデメシア派の *sapiens* 観であり、その様な *sapiens* 観として表現されるに至ったアカデメシア派の知識観ないし真理観である。

さて、3.5の冒頭でアウグスティヌスは、「知者 *sapiens*」と「愛知者・哲学者 *philosophus (studiosus)*」との相違を説明して欲しいとアリピウスに求める。アリピウスは初め、*habere* と *desidere* (ないし *amare*) との対比によってこれを区別しようとするが、アウグスティヌスがそれを *sapientiam scit* と *sapientiam scire desiderat* との対比として言い換えることには、逡巡を示す⁸⁾。アリ

ピウスがためらうのは、scire という言葉を使うことについてである。言い換えに同意を求められた彼は「その前に scientia を定義して欲しい」と頼む。この要請に対するアウグスティヌスの応えは、「偽なる知はあり得ない」(l. 9-10)、「誰も偽を知ることはない」(l. 27) である。そしてアウグスティヌスは、これらを認める以上は、アリピウスは sapiens scit sapientiam をも認めねばならない筈だ、と畳みかけていく。(ここで少し先取りして言うなら、第Ⅲ巻の全体を通じて、アカデメイア派との争点は、この sapiens scit sapientiam というトートロジーの様な言明を承認するか否かの争いとして、繰り返し描かれている。先に挙げた [B-c] の諸例における sapiens 型もまたこの言明のいわば変形として機能していると言えよう。我々は、それらがいかなる問題についての争いなのか、注意深く見極めなければならない。)

さて、アリピウスの立場を端的に示すのは、3.5 を承けた 4.9 での次のような言い方、即ち「アカデメイア派の sapiens には自分が sapientia を知っているに見える、と私 (Aly.) には見える」であろう。彼によればこのような言い方をするのは、「私 (Aly.) は知っている」「彼 (アカデメイア派の sapiens) は知っている」という二つの言い方を避ける為である (l. 62-5)。「videri 見える・思われる」という言い方で、アリピウスは「肯定も否定も避ける」(l. 73-4) アカデメイア派の立場を保とうとしているのである。

これに対するアウグスティヌスの反論は、3.5 で言及されているように、第Ⅱ巻で用いた論法に基づいている⁹⁾。即ち、今自分が尋ねているのは、「君 (Aly.) が知っていること quid scis」ではなく、「君にどう見えているか quid tibi videtur」なのである、と彼は言う (4.9)。つまりここでアウグスティヌスは、sapiens scit sapientiam という命題の真偽が決する「次元」(これを便宜上「V 次元」と呼ぶ¹⁰⁾) での真か偽かの問題を一旦棚上げにした上で、この命題がアリピウスに真と思われる (見える) か否かの方を問題にすることによって、結局アリピウスに、「もし ratio の任命するような sapiens が見出され得るならば」という限定つきで sapiens scit sapientiam を承認させてしまう。そして、

この命題を彼が承認する以上、問い直されるべきは「知 *scientia* は人間には与えられ得ない」と言いつつ「人は *sapiens* であり得る」とするアカデメシア派の立場である、と反論するのである (4.10)。

以上の展開に於いて、アウグスティヌスは、*aliquis (homo) scit aliquid* という形式をみたすものの一つとして *sapiens scit sapientiam* を挙げ、それが *ratio* から承認されざるを得ない言表である (何故なら *sapiens nescit sapientiam* という言表は、*scire* ということを、また *sapiens* や *sapientia* という言葉が無意味にしてしまうから cf. 14. 32) ことを巧みに使い、アカデメシア派の自家撞着を暴いたのであると、とりあえずは言えるだろう。しかし、無論、棚上げにされた問題は議論に参加している一同に強く意識されていて、その緊張の上にとそここでのアウグスティヌスの反駁の意義もまた位置づけられねばならない。続く 4.11 で、アリピウスがアカデメシア派の「同意してはならない」という主張は依然防衛されていると言って、プロテウスの譬を使いながら、*veritatem demonstrare* なしには彼等を論破できないと反論するのは、この棚上げに対する批判と解されねばならない。また、4.12 でアウグスティヌスが、自分 (Aug.) にもアカデメシア派にも *sapiens scit sapientiam* と[・]思[・]わ[・]れ[・]て[・]い[・]る[・]以上は、彼等も共に *veritas* を *approbare*, *assentire*, *consentire* しなければならないと言ったとたん、それまでずっと聞き手に回っていた一同が突然口を開いて、「一体誰が *veritas* を示す (*demonstrabit*) のか」とアカデメシア派側の反論を代弁するのも、棚上げされたV次元をめぐる緊張を示すものと解されねばならない。そして、このような仕方の問題点の所在をいわば再確認した上で、アウグスティヌスは彼等に対して次のように反論しているのであるということが重要であろう。即ち、「この点で彼等と張り合いたくない、私 (Aug.) にとっては *sapiens nihil scit* がもはや *probabile* ではないということ十分である¹¹⁾」と。

では、以上の議論に於いて、一体何が問われていると言うべきであろうか。4.5以降で自分の主張 (*sapiens scit sapientiam*) を *probabile* と述べるアウグスティヌスの「譲歩」は、全く第II巻での「作戦」通りである¹²⁾。そこでは、

相反する主張をとるアウグスティヌスもアカデメイア派も「知り得ず」、それを「知っている者」はいわば神とか *sapiens* だけなのである、とでも言うしかないような仕方でも語られるV次元での真偽について、自分 (Aug.) も *probabile* であると言ってもよい、と譲歩されていた。アウグスティヌスが「張り合いたくない」のはこの点である。しかし、見落としてはならないのは、この「不知」が、或は *veritatem demonstrare* のないことが、「肯定も否定も避ける」ことの原因になると、アウグスティヌスは考えていないことである。自分をそのような不知者 *stultus* として位置づけた上で、「我々は真そのものを認めるべきであると私は考える *approbare nos debere veritatem puto*」と彼が言うとき (5.12)、我々は、この *approbare* は、アカデメイア派が *scire, invenire* を条件として語る「同意 *assentire*」とは同じ次元で語られているのではないことに気付かねばならない。初め *sapiens scit sapientiam* に同意し得なかったアリピウスにとっては、*veritatem demonstrare (ostendere, 6. 13)* が、同意の条件であり、また、*scire* ということ語るための条件であった。これに対して、ここで *veritas* について「私は知っている」を否認しつつ、*sapiens scit sapientiam* に同意するアウグスティヌスの意図は、そのような条件を外すことにあるのである。

(II-ii) [B1] の議論は、先の表に示したように、B-a、B-b、B-c-イの、三つの部分から成っていると考えられる。[B-a] は [B] 全体の序に相当する。我々が彼の婉曲な言い方から読み取らねばならないのは、ここでアウグスティヌスが、アカデメイア派は (人々が非難するように) *veritas* を認めていないのではない、むしろ彼等の非難されるべき点はその「認め方」にある、と示唆しているのであること、そして、以下の [B] での論述の意図を、アカデメイア派の *argumenta* を明瞭にした上で自分の *resistere* を位置づけることにあるとしていること、である¹³⁾。

[B-b] の前半 (7.15~9.20) は、アカデメイア派の支持者をひきつけた、

その巧妙さについての検討 (7.15~8.17) に向けられ、後半 (9.18~20) で、アカデメシア派自身の論点が検討され始める。先ず、アカデメシア派の「知られ得ない」がゼノンの定義¹⁴⁾に應ずるものであることが言及され (9.18 l. 6-8), そこでも一つの論駁がなされるが (l. 9-10, この論点は [B-c-イ] 9.21 で繰り返される), その後の展開は少々込み入っている。「だが、ゼノンが何を言っているか我々は見ざるべきであろう」 (l. 10-11) と言って、ゼノンの定義を示した後、アウグスティヌスは、突然「プラトン派のお方は、こんなものが貴方を動かしたのか」と、二人称で詰問し始める。語り方を変えることで意図されているのは、言う迄もなく、アウグスティヌスの非難が何に向けられているかを強調することであろう。ここでは「プラトン派の方」が、ゼノンの定義を(悪しく)受け容れた結果、studiosus 達を学ぶ希望から引き離し、哲学の全ての営みを放棄させるに至っていると非難される (l. 13-16)。この3行余りの挿入を介して、続く9章19~20節は「哲学の敵」をめぐる考察とでも呼ぶべきものとして展開されることになる。そしてここでアウグスティヌスは、何故にアカデメシア派は哲学することを妨げると批判されねばならないのか、を明らかにするのである。

彼は先ず9.19で、「ゼノンの言うようなものは見出され得ない」というアルケシラスの解釈を受け容れたとき、アカデメシア派は結局「sapiens は sapiens でありかつ同時に sapientia に無知である」と言うことになる」と指摘する。そして、彼等はむしろ「人間は sapiens たり得ぬ」と言った方が、sapiens nescit sapientiam などと言うよりは、まだましであった(後者の方が durius である)、と批判する。ここで更に重要なのは、この二つの表現が、共に、人を哲学することから(言い換えれば veritatem quaerere から)背かせると非難されていることである。そして、後者を主張することが「氣違いじみ」(9.20 l. 44-5) たことを言うことになる」と非難されるのに対して、「人間は sapiens たり得ぬ」と言うことが人々を哲学することから遠ざけるとされる理由は、実に巧妙にも、次のような言い方をする人々と結び付けて語られている。即ち、

「友よ、哲学は *sapientia* 自体ではなく、*studium sapientiae* と呼ばれる、君がこれに専心しても、生きている間は決して *sapiens* にはなれまい、と言うのも *sapientia* は神の元にあり、人間がそれに達することは不可能だからね、でも君がこの研究に十分励み、浄化されるなら、君の魂 (*animus*) は、この世の生の後に、つまり人間で在ることをやめたときに、た易くそれを享受するだろう」(l. 33-9) と。

我々はこの表現が、丁度、第 I 巻でリケンティウスが主張していた *sapiens* 像と結び付くものであること、そしてまた、*sapientia* を知らない *sapiens* という「気違いじみ」た帰結もまた、結局はそのような *sapiens* 像に由来するものであること、に気付かねばならない。第 I 巻で、アカデメシア派に与すリケンティウスは、神のみがそうであると言えるような *sapiens* と人間である限りでの *sapiens* とを論じ分けることによってこの矛盾を回避しようとしたが、そうすることによって彼は問題そのものを回避してしまっていた¹⁵⁾。ここでは、*studium* という語を介して、*sapientia* がいわば「論じ分け」られ、哲学する(そう生きる)ことが我々にとって「最高の務め」であるのは何故か、という抑々の問い¹⁶⁾が安直に回避されてしまうことが、戯画的に描かれている。アウグスティヌスの批判は、一貫して、そのような *sapiens*, *sapientia* 観を生み出す、アカデメシア派に向けられていたのである。

さて、以上に続けてアウグスティヌスは、このようなアカデメシア派の「解釈」を導いたとされるゼノンの定義がほんとうに「何か哲学を害することを語るよう強いていた」(l. 46-7) かどうかの吟味に移り、続く 21 節以下の「*perceptio* をめぐる議論」[B-c] は、再びゼノンの定義に即して検討されることになる。9.21 が、[B-c] の最初の節であること、またここでの *stultus* 型の論証が、「反対例」を示す仕方での論駁であること、つまりこの 9.21 [B-c-イ] が [B-c-ロ] の先例であること、は既に見た。では、アウグスティヌスが「以上で十分だ」と言って、9.21 の終わりで [B1] を締めくくったのは、一体いかなる観点からであったのか。

注目されねばならないのは、更にアウグスティヌスが、もう一つの論駁を用意していることである。ここで想定されているアルケンラースの反論は、V次元の不知を論拠にするものである¹⁷⁾。それに対してアウグスティヌスは「たとえばそれについて我々が不確かであるとしても、知るということ (scientia) は我々をそのようにして見捨てはしない、なぜならゼノンの定義が vera か falsa かどちらかであるということを我々は知っている故、我々は何も知らないのではないのだから」と反論する。この反論を通じてアウグスティヌスは、sapiens でない「不確かな」我々と、「何も知らない訳ではない」stultus たる我々との対比を前提にした上で、vera を後者に位置づけているのである¹⁸⁾。

(II-iii) [B2] について若干のことを付け加えて置きたい。以上のような [B1] を承けて始められる [B2] が、perceptio と assensio とをめぐる議論のそれぞれの始まりのところで、或る互いによく似た比喩とともに語り出されていることは、興味深い。我々は、10.22 1.22-27 と 14.30 1.16-20 とが相応するものであり、そしてそれらが共に「哲学の敵」に言及するものであることを見逃してはならない。それらは、[B2] でのアウグスティヌスの批判の意図がどこにあるかを示唆するものであると言えよう。

次に、[B-d] について述べなければならない。冒頭14.30で言及されるように、「同意してはならない」は、ここで単に「もう一つの」主張として批判検討されているのではなく、[A] の5.11でのアリピウスの反論が示すように、「知られ得ない」が論破されること自体によって一層強化されるかに見える主張として論駁されている。

さて、[B-d-イ] 14.30~32は sapiens をめぐって sapiens assentitur sapientiae (32 1.67-8) を論証しようとする、sapiens 型の論駁である。興味深いのは、[A] での議論に正確に対応するかのようになり、ここでもV次元を念頭に発せられるアカデミア派からの反論（「sapiens は sapientia をどこに見出すのか」31 1.44-56）が引き出され、批判されていることである。更に、この sapiens

型の論駁に対応して次のような *stultus* 型の議論の展開が計られていることに注目すべきである。即ち、32 節の終わりでアウグスティヌスは、これで論証として十分であるとしながらも、抑々「同意してはならない」という主張は「error を避けるため」であったこと（このことは II. 5. 11 l. 8-9 で示されていた）に応じて、「かの error について」論ずることへと転じる。そしてそこで彼は、議論を、error を避けるべき *sapiens* にとつてのではなく、*stultus* たる人間にとつての、「同意してはならない」の問題〔B-d-ロ〕へと転ずるのである。この実に巧妙な転換は、「疑わしいことへの同意」という新しい角度を導入することによって、*sapiens* と *stultus* とをきっぱりと切断している (l. 68-73)。そして〔B-d-ロ〕15. 33~16. 36 でアウグスティヌスは、「人間にとつて」ということなら、旧来の説「何も是認しない人は何も言行しない *qui nihil approbat, nihil agit*」がアカデメイア派への反論として有効であるとし (15. 33)、これに対するアカデメイア派の一見尤もらしい *probabile (verisimile)* の説の導入は「かの error」から我々を少しも護ってくれないことを、サマルドクス人の詐欺師 (34)、姦通した若者 (35-6) の比喻によって、各々別の角度から、示すのである¹⁹⁾。

アウグスティヌスは、*sapiens* 型を或は *sapiens scit sapientiam* を主張することによって、*sapiens* の位置を、また V 次元を知ること、我々の生がそこに位置づけられているところから、厳しく区別している。また、*sapiens* と我々との相違を、先の引用 (本文33頁) に典型的に見られるような (死後を語る、また第 I 巻での「生まれつき *natura*」を語る²⁰⁾) 描き方によって位置づけることを否定している。他方また、彼は *veritas* と我々との関係を ‘*quaerere*’ として語り、しかも、*demonstrare veritatem* の次元 (或は V 次元) で「知る」のは、我々から峻別された *sapiens* のみであると繰り返し主張する。*stultus* たる我々の知は、*stultus* たる限りで、いわばどこ迄行っても V 次元の「知」ではあり得ず、いかなる意味でもそのような「知」の「基礎」や「出発点」や「原

点」として語られ得るものではない。彼の挙げた positive knowledge は、アカデメイア派の「人間である限りの sapiens」を無意味にし、いわば「真正の」sapiens がこれと類比的に語られる途を遮断する。それは同時に、人間にとって「知る」ということがV次元の「知」や sapientia の獲得と類比的に語られることを否定することである²¹⁾。これに対してアカデメイア派は、我々のところに位置づけられていた vera や scio を否定するというまさにそのことによって、却ってそれらがV次元の「知」と何らかに関わるものであると語り出す道を開いてしまっていたのである。

我々は、第Ⅱ巻で彼が、我々を「自分を説得することによって言行する者」と位置づけ、その自己の説得の形式が「わたしは真だと思^う」という仕方で為されるかぎり、我々の生はその都度その「わたしの思^い」に於いて、何らか veritas と関わるのである、と論じていたことを²²⁾、ここで思い起こす必要がある。‘veritatem quaerere’は、そのような「思^い」に於いて quaerere という仕方で veritas へと向けられる我々の生、つまりそのように置かれた我々の生を生きること、として受け止められていたと見做すべきである。それは、scire の目的語である sapientia と veritas との区別が自分には分からない、と言うアリピウスの観点 (3. 6 l. 65-9) とは全く異なったものであったと言わなければならない。

アウグスティヌスは quaerere veritatem の、つまり、哲学することの、意義を、veritas とそれを demonstrare できない我々との間の、以上のような緊張のうちに語り出している。彼の「不知の自認」は、このような quaerere veritatem のいわば原理ともいべき条件であった。アカデメイア派が「哲学することの敵」であるのは、彼等の「不知」が、それとは全く異質なものであったからなのである。

註

Contra Academicos からの引用は C. C. 版、行数は各章のそれである。

1) *Enchi.*, 7. 20, *Retr.*, 1. 1 等。

- 2) 典型的には O'Meara, J., *St. Augustine Against the Academics*, A. C. W. 12, Newman Press, 1951, p. 30. Kirwan, C., 'Augustine against the Skeptics', in *The Skeptical Tradition*, éd. M. Burnyeat, U. C. P., Berkeley, 1983. p. 206.
- 3) sum について研究者達は明確ではないことを認めながらも、同時期の *De beata vita* や *Solil.* から補いがちである。Kirwan, C., p. 219. Gilson, E., *Introduction à l'étude de Saint Augustin*, 4ème ed. Vrin, 1969, p. 50, n. 3. Cf. Mathews, G., Si Fallor, Sum' in *Augustine*, ed. R. A. Markus, Doubleday, 1972, p. 157.
- 4) Gilson, p. 48 ff. Kirwan, p. 211. 長沢信寿『アウグスティヌス哲学の研究』創文社, 昭和35年 p. 44 等。だが、このように彼の懐疑論批判を見做してしまった上で、彼を否定するのは見当違いである。Kirwan, p. 218. O'Meara, p. 18. Frede, M., 'The sceptic's two kind of assent and question of the possibility of knowledge' in *Essays in Ancient Philosophy*, Univ. of Minnesota Press, 1987, pp. 218-9.
- 5) Verbeke, G., 'Augustin et le stoicisme', *Recher. Aug.* 1, 1958, pp. 67-89. 殊に p. 77. Colish, M. L., *The Stoic Tradition from Antiquity to the Early Middle Ages, II*, Brill, 1985, pp. 176-9, 181-198. O'Meara, p. 15.
- 6) O'Meara, pp. 16-18; Jolivet, pp. 10-11 等 O'Meara は失敗を示唆しさえする p. 30.
- 7) この点は既に指摘されている cf. O'Meara, p. 189, n. 27.
- 8) ここで Aug. が「我々は finis に到達している」と言っていること、次節 (3.6) で Ayp. が「finis に来て突然我々の隔たっていることが分かった」と言っていることに注意。
- 9) 3.5 l. 31-2 は、II. 13. 30 との対応を示唆している。これらの箇所での probable ないし videri の用法は、probabile を verum の代概念として導入することに対する II 巻での批判を経た上での、いわば限定付用法である。拙論「アウグスティヌス『アカデメイア派反駁論』——もう一つの懐疑論批判」銀杏学園紀要, 第10号, 1986, pp. 38-40 参照。
- 10) V次元は、あくまでもアカデメイア派との争点を明瞭にするために想定されている。この次元に位置づけられる「真」を「知る」ことを、何らかでも目指すものとして、アウグスティヌスの言う quaerere veritatem を想定してはならない。V次元についても、拙論 pp. 37-40 を参照されたい。
- 11) この箇所に対応する [B-d] 14. 30 では, sapiens scit nonnihil が probable であれば、そのことは sapiens assensionem sustinere debet がもはや verisimile でないことをも導くものであり、この様にしてアカデメイア派の主張が取り去られることによって彼らが「哲学」の妨げではなくなることこそアウグスティヌスの望みであると言われている。

- 12) 上掲註(9)(10)参照。
- 13) [B]の議論は、II. 10. 24の予告に応じるものである。そこでアウグスティヌスは、彼等が単なる *inventio veritatis* の反対者でないことを明らかにし、なぜ彼らは自分達の考えを隠したかについていずれ自分の見解を示したいと言っている。[B]の議論の意図を語り出しているこれら二つの箇所は、アカデメイア派に同情的ないし肯定的な文脈として読まれがち(そして彼のアカデメイア派に対する態度は不鮮明であるとされがち)だが、それは読み違えであろう。II. 10. 24 l. 25-6で彼が、そうすることは、「アカデメイア派に怖気づいたからではなく、彼らに対して武装する」ことでもある、と言っていることに注意すべきである。
- 14) ここではアウグスティヌスのゼノンの「定義」解釈の是非、18節と21節との異同等などには触れないでも差し支えない。
- 15) I. 5. 9, リケンティウスは「人間の *finis*」という枠を持ち込むことによって、「真」「知」をいわば「向こう側」と「こちら側」で論じ分けようとする。そうすることで「知」を「向こう側」の神棚に祭り上げ、他方「こちら側」から「不知」を追い出してしまうことこそアウグスティヌスの看取したアカデメイア派の主張がはらむ危険であったと言えよう。拙論 pp. 35-36 参照。
- 16) 第I巻での討論は、*verum nos scire oportere* への一同の承認から開始され(ここでの *verum* は、第III巻での *vera* と同列に語られているのではない、拙論 p. 34 参照)、「それは何故か」が問われていき、それを「身体という牢獄から放たれる」(3.9 l. 69-70)とか「探求のもたらす *animi tranquillitas*」(8.22 l. 48-57)といった仕方ではリケンティウスが語ることをもたらしめているアカデメイア派(ないしその通俗的理解)が吟味の場に引き出されてくる。拙論 p. 34 参照。
- 17) 74行目の *praeter* や75行目の *eius incerti* といった表現はこのことを示すものと読まれるべきである。
- 18) ここで「対比」を安易に何らかの仕方に関係づけてしまうことこそ警戒さるべきである。cf. 12. 27 l. 17-9では、*egone concludere dubitabo recte mihi uideri scire sapientem quicquid in philosophia uerum est, cum ego inde tam multa uera cognouerim?* と言われる。我々は、このくどい迄の表現に注目すべきである。ここで「私が然々の *uera* を知っている (*scio, novi*)」は、直ちに *sapiens scit* の証拠として挙げられているのではなく、「*sapiens scit* と私が思う」ことを正当化する主張として挙げられているに過ぎない。
- 19) アウグスティヌスは懐疑論のもたらす害悪について、16. 35で、風刺的な挿話をし、我々の生きているその場面で我々が「真だと思ふ」ことさえなければ、我々は非難されることなく悪事を働くことができると指摘している。言うまでもなく、彼はここで道学者的な論点を挙げて論証の代わりにしようとしている訳ではなく、第II巻で

なされた議論を踏まえて、即ち、「同意しない、言い換えれば、真であると思ひさえしない」ということによって、我々が自分自身の言行について、いわば、問うことも問われることも出来なくなることを、指摘しているのである。拙論 pp. 40-43 参照。

20) 上掲 (15) 参照。

21) それは、彼の goal を ‘the possession of veritas or sapientia’ (Johnson, D., ‘Verbum in the early Augustine (386-397)’, *Recher. Aug.* 8, 1972, pp. 25-53) と見做す一般的な傾向が veritas と sapientia との混同によって見落としてきた、彼の新しい視点であろう。

22) 拙論 pp. 42-43 参照。